



# 筑紫女学園大学リポジット

## On mati and śruta in Jain Epistemology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 久泰, KOBAYASHI, Hisayasu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/201">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/201</a>

# ジャイナ教の五知説

## — mati と śruta —

小林久泰

### On *mati* and *śruta* in Jain Epistemology

Hisayasu KOBAYASHI

#### 0. 問題の所在

ジャイナ教では、古くから知を五種類に分類し、われわれの認識構造を分析してきた。このような五知の分類に基づくジャイナ教の認識論は、認識の真偽を問題として発展した他学派のプラマーナ論の影響を受けながら、複雑に入り組んだ多重構造の知の分類を提示するようになるが、その詳細は先行研究に譲る<sup>1</sup>。五種類の知とは以下のものである。

- (1) mati (or ābhiniḃodhika) 「感官知」
- (2) śruta 「聖典知」
- (3) avadhi 「直観知」
- (4) manahparyāya 「他心知」
- (5) kevala 「独存知」

本稿が考察対象とするのは、最初の二つ、matiとśrutaである。残りの三つ、直観知、他心知、独存知が修行者のある種の超能力的な特殊な知であるのに対して、この二つは一般の人も持ち得るような常識的な知である。一般的に我が国における従来のジャイナ教研究では、この二つのうち、matiについては「感官知」、śrutaについては「聖典知」という訳語が慣例的にそれぞれ与えられてきた<sup>2</sup>。しかし、宇野(智) [2010: n. 6]も指摘するように、これらの訳語は果たして適切であったろうか。ジャイナ教を専門としない研究者にとって、これらの訳語は、まず誤解と混乱しか与えないであろう。例えば、śrutaは「聖典知」といっても、広く「言語に関わる知」を示す場合が大半であり、matiは「感官知」といっても、言語的な知も含むものであり、さらにśrutaは「感官知」ではないが、「感官から生じる知」であるからである。

このように極めて複雑なmatiとśrutaの関係を分析した論書にジャイナ教白衣派学僧ジナバドラが著した『ヴィシェーシャ・アーヴァシュヤカ・バーシャ』（VĀBh）がある。ジナバドラは、特にVĀBh 第81詩頌から第176詩頌という約100詩頌もの分量を割いて、徹底的にmatiとśrutaについて論じている。

本稿の目的は、このVĀBhの当該箇所を特にマラダーリ・ヘーマチャンドラによる注釈書『ブリハッド・ヴリッティ』（BV）を用いて検討することを通じて、ジャイナ教五知説に見られるmatiとśrutaとはいかなるものかをもう一度考察し直し、それらの訳語としていかなるものが相応しいかを提案することである。

## 1. mati は「感官知」か

まず最初に、matiに「感官知」という訳語を与えることが適切ではないことを指摘したい。VĀBhでジナバドラはmatiとśrutaを次のように定義する。

VĀBh 99: *indriyamaṇonimittam jaṃ viṇṇāṇam suyāṇusāreṇam /  
niyayathuttisamattham taṃ bhāvasuyam māṃ sesam //*  
[Skt.: *indriyamanonimittam yad vijñānam śrutānusāreṇa /  
nijakārthoktisamartham tad bhāvaśrutam matiḥ śeṣam //*]

感官やマナス（内官）を原因とし、ことば（śruta）に従って〔起こる〕知、それがbhāvaśruta<sup>3</sup>であり、〔その知〕自身に顕現している対象を〔他者に〕伝えることができるものである。残りの〔感官とマナスを原因とする知〕はmatiである。

ジナバドラは自注（SV）で次のように説明している。

SV 22, 21-23 on VĀBh 99: *iha yad indriyamanonimittam ātmano vijñānam śrutagranthānusāreṇāvīrbhavati tadarthābhīdhānasamartham ca tat śrutam, śeṣam indriyamanonimittam vijñānam matir iti.*

ここでは、感官やマナスを原因とし、聖典（śrutagrantha）に従ってアートマンに起こる知、そしてその対象を〔他者に〕表示することができる〔知〕、それがśrutaである。感官やマナスを原因とする残りの知はmatiである。

これらの記述からも、「感官やマナスを原因とする」（indriyamanonimitta）という限定が、matiとśrutaの両方に結びつくことが明白である。つまり、matiとśrutaの両者を「感官知」か否かということで区別することはできないのである。

matiもśrutaも「感官やマナスを原因とする」というこのような考え方は、次のような言明に基づいている。

VĀBh 93: *indriyamaṇonimittam parokkham iha saṃsayādibhāvō /  
takkāraṇam parokkham jaheha sābhāsam aṇumāṇam //*  
[Skt.: *indriyamanonimittam parokṣam iha saṃśayādibhāvāt /  
tatkāraṇam parokṣam yatheha sābhāsam anumānam //*]

間接知 (parokṣa) とは、感官やマナスを原因とする [知] のことである。何故なら、この [知] には疑惑 (saṃśaya) などが起こるから。この世間では (iha)、間接知がそれら [感官やマナス] を原因とする [と経験される]<sup>4</sup>。例えば、[不成立 (asiddha)、不確定 (anaikāntika)、矛盾 (viruddha) といった] 誤った推理 (sābhāsam anumānam) [や正しい推理] が [感官やマナスを原因とするの] と同じように<sup>5</sup>。

知は大きく直接知 (pratyakṣa) と間接知 (parokṣa) に二分される。そのうち、後者には、冒頭に挙げた五種類の知のうち、matiとśrutaが分類され、前者には残りの三つ、直観知、他心知、独存知が分類される。ここに挙げた記述では特に間接知とはどのような知であるのかということが説明されている。この記述から言えるのは、「感官やマナスを原因とする知」であるか否か、言い換えれば、「感官知」であるか否か、という視点は、直接知と間接知を峻別するための基準であって、matiとśrutaを峻別する基準とはならないということである。

それではmatiとśrutaの区別はどのような基準でなされるのか。後代のジャイナ教徒ヤショーヴィジャヤは、綱要書性格を持つ彼の著作『ジャイナ・タルカ・バーシャー』(JTBh)の中で、ジナバドラの見解をより簡潔なかたちで提示している。

JTBh 2, 22-23: tatrendriyamanonimittam śrutānanusāri jñānam matijñānam, śrutānusāri ca śrutajñānam.

このうち、matiとは、感官やマナスを原因とする、ことば (śruta) に従わない知であり、他方、śrutaとは [感官やマナスを原因とする] ことばに従う [知] である。

このヤショーヴィジャヤの記述から明らかであるように、ジナバドラにとってmatiとśrutaを峻別する基準は、「感官知」であるか否かではなく、「ことばに従うもの」(śrutānusārin) であるか否かに他ならないのである。

以上のことから明らかなように、ジナバドラによれば、「感官やマナスを原因とする知」の中に「ことばに従わない知」と「ことばに従う知」の二種類があり、前者はmati、後者はśrutaというように規定されるのである。従って、matiに「感官知」という訳語を単純に与えるのは不適切であると言える。śrutaもまた「感官知」なのである。

## 2. śruta は「聖典知」か

ここで先行研究者たちがmatiとśrutaをどのように訳しているのかを確認しておこう。興味深いことに、インドを代表するジャイナ教研究者らも、matiとśrutaについてそれぞれ微妙に異なる訳語を与えており、翻訳に苦心した痕跡が見られる。

	mati(-jñāna)	śruta(-jñāna)
Shasti, I. C. [1990]	—	“scriptural knowledge”
Tatia [1951]	“sensuous knowledge”	“scriptural or verbal knowledge”
Mehta [2002]	“non-verbal comprehension”	“verbal comprehension”

これらのうち、「言語的な知」であるか否かということだけでmatiとśrutaを訳し分けているMehta [2002]の理解が、これまで見てきたジナバドラの理解を最も反映したものであると言える。しかし何故、śrutaは「聖典知」と訳されてきたのだろうか。

この問題を考察するにあたり、Shastri, I. C. [1990]が与えるśrutaの分析は非常に有益である。Shastri, I. C. [1990: 281-282]は、śrutaという概念を大きく3つの段階に分けて考察する。まとめると次のようになる。『タットヴァ・アルタ・スートラ』(TAS)<sup>6</sup>などに見られるように最初期の段階では、śrutaという知は「聖典から得られる知」を意味していた<sup>7</sup>。それが第二の段階で、『アーヴァシヤカ・ニルユクティ』(ĀNir)<sup>8</sup>、『ナンディー・スートラ』(NS)<sup>9</sup>、VĀBhなどに見られるような「ことばと結びついた知」全般を指すようになる。そして第三の段階では、śrutaは、シッダセーナ・ディヴァーカーラの著作『ニシュチャヤ・ドヴァートリンシカー』(NDT)<sup>10</sup>に見られるように「matiと全く区別されない知」として理解されるようになる。ただしこの第3段階のśruta理解は唯一ヤショーヴィジャヤによって支持されるものの<sup>11</sup>、他の思想家には受け入れられなかったようである<sup>12</sup>。後代の思想家に最も影響を与えたのは第二段階のśruta理解であったようである。つまり、śrutaには元々「聖典知」という意味があり、それが時代を経て、広く「言語知」一般を指すようになったということである。従って、本来の意味から考えれば、śrutaを「聖典知」と訳すとしても、それは間違いとは言えない。先にVĀBh 99のジナバドラによるśrutaの定義を見たが、そのうちの「ことば(śruta)に従って[起こる知]」という表現を、ジナバドラ自身、SVにおいて「聖典(śrutagrantha)に従って[起こる知]」と言い換えているのも<sup>13</sup>、この元来の「聖典知」というニュアンスを反映してのことであると考えられる。

ところで、matiとśrutaを峻別する基準として先に指摘したこの「ことばに従うこと」(śrutānusāritva)とは一体何か。マラダーリ・ヘーマチャンドラは次のように説明する。

BV 33, 17-19 on VĀBh 99: śrūyata iti śrutam, dravyaśrutarūpaṃ, śabda ity arthaḥ. sa ca saṃketaviṣayaparopadeśarūpaḥ, śrutagranthātmakaś ceha grhyate. tadanusāreṇaiva yad utpadyate tat śrutajñānam, nānyat. idam uktaṃ bhavati ---- saṃketakālapravṛttaṃ śrutagranthasambandhinam vā ghaṭādiśabdān anusṛtya vācyavācakabhāvena saṃyojya 'ghaṭo ghaṭaḥ' ityādyantarjalpākāram antaḥśabdollekhān vitam indriyādinimittam yaj jñānam udeti tac chrutajñānam iti.

śrutaとは聞かれる対象である(śrūyata iti śrutam) [と語義解釈される]。dravyaśrutaという私たちの[śruta]のことである。ことば(śabda)という意味である。そして、それ(śruta)は、言語習得(saṃketa)に関する他者からの教示、もしくは聖典(śrutagrantha)そのものとしてここでは理解される。そのような[śruta]に従って起こる[知]、それこそがśrutajñānaであり、他のものはそうではない。次のことが意図されている。すなわち、言語習得時に適用された「瓶」などということば、もしくは聖典と結びついた[「瓶」などということば]に従って、表示関係(vācyavācakabhāva)により[瓶などの実在物と「瓶」などということば]を結びつけたうえで、「瓶だ、瓶だ」などという内的つぶやき(antarjalpa)というかたちの、内的な言語的描写(antaḥśabdollekha)を伴った、感官などを原因とする知が生じるが、それ

がśrutajñānaである<sup>14</sup>。

具体的に、我々が外国語を習得する場合を考えてみよう。その外国語を未習得の場合、何かしらの事物が目の前にあっても我々はそれを如何に表現してよいか分からない。ネイティブやその外国語に熟達した人から「これは××と云います」と教示されることにより、はじめて目の前にある事物とことばを結びつけることができる。もしくは、辞書や教科書といった書物に書かれていることから、「これは××と表現するのだ」と理解することもあるだろう。さて、このような言語的取り決めが行われた後に、別の機会に同じ事物を見たとしよう。その人は目の前にある事物と以前に習得した、それを表現することばを結びつけ、心の中で「××だ、××だ」とつぶやく。このように、ある事物を「××だ」というように言語的に理解する知がここでśrutajñānaと言われている。

以上のことから明らかなように、matiとśrutaを峻別する基準である「ことばに従うこと」(śrutānusāritva)とは、言語を習得する際に他者から教示された「ことば」や聖典などの書物に書かれている「ことば」を前提として起こる知であるか否かということである。

従来、śrutaには「聖典知」という訳語が与えられてきた。もしも「他者からの教示」もある種の権威、すなわち「聖典」とみなしたうえで<sup>15</sup>、「聖典に基づいて起こる言語的な理解」のことを「聖典知」と呼ぶのであれば、その訳語も決して間違っていない。しかし、より単純に「言語知」という訳語を与えた方が誤解は少ないはずである。本稿ではśrutaに対して「言語知」という訳語を提案したい。

### 3. 「言語知」と「非言語知」

「ことばに従う」かそうではないかを基準としてmatiとśrutaを峻別するのであれば、先述したMehta [2002]の理解と同じように、matiとśrutaをそれぞれ「非言語知」と「言語知」と訳するのが最も適切のように思われる。しかし問題はそう単純ではない。ジャイナ教認識論においてmatiは対象を「××だ」と判断する、ある種の「言語的理解」を含み得るものだからである。簡単にジャイナ教認識論におけるmatiによる知覚プロセスを提示するならば、以下のようになる<sup>16</sup>。

- (1) アヴァグラハ (avagraha、感受)：「何かある」と対象の存在性のみを把握している段階
- (2) イーハー (ihā、意欲)：「何だろう」と対象の詳細を吟味している段階
- (3) アパーヤ (apāya、判断)：「××だ」と対象を確定する段階
- (4) ダーラーナー (dhāranā、保持)：「××だ、××だ」と確定した知を保持している段階

このうち、第1段階のアヴァグラハを除き、残りの3段階はすべて言語とかかわる。従って、当然、次のような反論が想定される。

BV 33, 24-26 on VĀBh 99: nanu yadi śabdollekhasahitaṃ śrutajñānam iṣyate, śeṣaṃ tu matijñānam, tadā vakṣyamāṇasvarūpo 'vagraha eva matijñānam syāt, na punar ihāpāyādayaḥ, teṣāṃ śabdollekhasahitatvāt. matijñānabhedatvena caite prasiddhāḥ. tat katham śrutajñānalakṣaṇasya

nātivyāptidoṣaḥ. katham ca na matijñānasyāvyāptiprasaṅgaḥ.

【反論】もしも言語的描写を伴った[知]がśrutajñānaであり、残りはmatijñānaであると認めらるれば、その場合、後で述べられる性質を持つアヴァグラハだけがmatijñānaとなってしまう、イーハー、アパーヤなどはそうではないことになってしまおう。何故なら、それら[イーハーなど]は言語的描写を伴っているから。しかし、それら[イーハーなど]はmatijñānaの下位分類としてよく知られている。従って、śrutajñānaの定義に[イーハーなどまでが]過大に含まれる(ativyāpti)という過失がどうしてないことになろうか。また、matijñānaに[イーハーなどが]含まれないこと(avyāpti)という困ったことがどうして帰結しないことになろうか<sup>17</sup>。

この反論に対して、マラダーリ・ヘーマチャンドラは次のような回答を与えている。

BV 33, 27-29 on VĀBh 99: yat tāvad uktam --- avagraha eva matijñānaṃ syāt, na tv īhādayaḥ, teṣāṃ śabdollekhasahitvat, tad ayuktam, yato yady apīhādayaḥ sābhilāpāḥ, tathāpi na teṣāṃ śrutarūpatā, śrutānusāriṇa eva sābhilāpajñānasya śrutatvat.

【答論】まず「アヴァグラハだけがmatijñānaとなってしまう、イーハー、アパーヤなどはそうではないことになってしまおう。何故なら、それら[イーハーなど]は言語的描写を伴っているから」と述べられたが、それは正しくない。何故なら、たとえイーハーなどが言語表現を伴う(sābhilāpa)としても、それら[イーハーなど]はśrutaそのものではないから。何故なら、言語表現を伴う認識[であっても]、ことば(śruta)に従うものだけがśrutaであるから。この回答のポイントは、マラダーリ・ヘーマチャンドラが「言語表現を伴うこと」と「ことばに従うこと」を別次元のものとして捉えている点にある。どうして次元が異なるものと見なしえるのか。対論者は続けて反論する。

BV 33, 29-30 on VĀBh 99: athāvagrahādayaḥ śrutaniśritā eva siddhānte proktāḥ, yuktito 'pi cehādiṣu śabdābhilāpaḥ saṅketakālādyākarmaṇiśabdānusaraṇaṃ antareṇa na saṅgacchate. atah katham na teṣāṃ śrutānusāritvam.

【反論】(1) アヴァグラハなどはことばに基づくもの(śrutaniśrita)に他ならないと経典(siddhānta)に述べられている。(2) また論理(yukti)に基づいても、イーハーなどにおける言語表現(śabdābhilāpa)は言語習得時などに聞かれたことばに従うことなしには妥当しない。従って、どうしてそれら[イーハーなど]がことばに従うもの(śrutānusārin)でないことになろうか。

ここで対論者は教証と理証という二つの観点から反論を挙げている。まず第一に、Nandīsūtraなどの経典に見られるように、白衣派の伝統では、matiは「ことばに基づくもの」(śrutaniśrita)と「ことばに基づかないもの」(aśrutaniśrita)に大きく二分される。そして、前者「ことばに基づくもの」の下位分類として、アヴァグラハ、イーハー、アパーヤ、ダーラナーが配置されるのである<sup>18</sup>。従って、経典にもmatiがことばとかかわる知であることが明示されていることになる。

また、「言語表現を伴うこと」は以前にことばを全く習得していなければあり得ない。従って、

論理的に考えてみても、「ことばに従うこと」は「言語表現を伴うこと」に必然的に結びつくはずである。どうして言語表現を伴う知であるのに、ことばに従う知ではないということがあり得ようか。

このような反論に対して、マラダーリ・ヘーマチャンドラは次のように答える。

BV 33, 30-32 on VĀBh 99: tad ayuktam, pūrvam śrutaparikarmitamater evaite samupajāyanta iti śrutaniśritā ucyante, na punar vyavahārakāle śrutānusāritvam eteṣv asti, vakṣyate ca --- “pūrvam suyaparikammiyamaissa jaṃ sampayam suyāyam, taṃ suyanissiyam” [Skt.: pūrvam śrutaparikarmitamater yat sāmpratam śrutāṭitam, tat śrutaniśritam] (VABh 169abc) ityādi.

【反論（1）に対する答論】それは正しくない。以前にその人のmatiがことば（śruta）と結びついたことのある人にとってのみ、それら [アヴァグラハなど] が生じる。従って、[それらアヴァグラハなどは]「ことばに基づくもの」（śrutaniśrita）と呼ばれる。しかし、日常活動時にはそれら [アヴァグラハなど] がことばに従うことはない<sup>19</sup>。さらに [次のように] 後に述べるであろう。すなわち、「以前にその人のmatiがことば（śruta）と結びついたことのある人に、いま現在ことばを超えた [すなわち、ことばに期待しない] [認識が生じるが、] その [知] がことばに基づくもの（śrutaniśrita）である」（VABh 169abc）云々と。

この回答のポイントは、実際に認識が起こっている際に以前に習得された「ことば」が意識されているかどうかということであろう。言語的素養を全く持たない人には、アヴァグラハなどは起こらない。その意味でそれらは「ことばに基づくもの」（śrutaniśrita）と言われる。しかし認識の時点で、以前の言語習得時のことばが意識されていなければ、それは「ことばに従うもの」（śrutānusārin）ではないということである。

マラダーリ・ヘーマチャンドラは続けて言う。

BV 33, 32-36 on VĀBh 99: yad api yuktito 'pi cetyādy uktam, tad api na samīcīnam, saṃketa-kālādyākaraṇīṣābdaparikarmitabuddhīnām vyavahārakāle tadanusaraṇam antarenāpi vikalpaparamparāpūrvakavividhavadanapravṛttidarśanāt. na hi pūrvapravṛttisaṃketāḥ, adhītaśrutagranthāś ca vyavahārakāle pravikalpante --- etacchabdavācyatvenaitat pūrvam mayāvagatam ityevamrūpaṃ saṃketam, tathāmukasmin granthe etad ittham abhihitam ityevam śrutagranthaṃ cānusranto dṛśyante, abhyāsapāṭavavaśāt tadanusaraṇam antarenāpy anavataṃ vikalpabhāṣaṇapravṛttech. yatra tu śrutānusāritvam tatra śrutarūpatāsmābhir api na niśidhyate.

【反論（2）に対する答論】「また論理に基づいても [云々]」とも [対論者によって] 述べられたが、それもまた正しくない。何故なら、言語習得時などに聞かれたことばと結びついた知を持つ人々には、日常活動時にその [ことば] に従うことがなくとも、一連の概念的思考（vikalpaparamparā）を前提とする様々なことばが起こることが経験されるから<sup>20</sup>。というのも、以前に言語的取り決め（saṃketa）をした人たちや聖典（śrutagrantha）を学んだ人たちが日常活動時にいちいち考えることなどないからである。すなわち、「これは、この語の表示対象として、以前私によって理解されたものだ」というような言語的取り決め



(samketa) に従うことは経験されないし、また「ある論書でこれはこのように表現されていた」というように聖典 (śrutagrantha) に従ったりすることも経験されない。何故なら、反復経験による熟達 (abhyāsapāṭava) によって、それらに従うことがなくとも、途切れることなく概念的思考をことばにすることがあるから。一方、ある [知が] ことばに従う場合には、その [知] が śruta であることを我々も否定しない。

ここでも先と同じことがポイントとなっている。すなわち、以前の言語習得時のことばが認識が現に起こっている時点で意識されているかどうかということである。例えば、我々が母国語以外の言語でものを把握したり思考したりする場合、辞書を引くなり、単語の意味をいちいち確認しなければならない。しかしその言語に習熟したならば、辞書などを用いることなく、さらには単語の意味など全く意識することなく、母国語と同様に、ものを把握したり思考したりすることができる。辞書を引くなどする初期の段階を経なければ、後の無意識のうちにその言語を使うという段階は訪れない。しかし無意識のうちに言語的な判断を下しているからといって、その知が以前見た辞書などに従っているとは言えない。以前に辞書などを通じて身につけた言語的素養に基づく知は、「ことばに基づくもの」(śrutaniśrita) ではあっても、認識が起こっている時点で「ことばに従うもの」(śrutānusārin) であるとは限らないのである。

#### 4. 結論

以上検討してきたことから、以下のことが言える。

(1) mati も śruta も「感官やマナスを原因とする」間接知 (parokṣa) である以上、「感官知」か否かという基準は両者を峻別するものとはならない。よって mati を「感官知」とする従来の解釈は適切ではない。

(2) śruta を「聖典知」と訳すことも可能であるが、その際には、「聖典」に「他者からの教示」も含意させたくて「聖典に基づいて起こる言語的な理解」という意味で解釈する必要がある。

(3) ジナバドラの議論では、mati と śruta を区別する基準は「ことばに従う」(śrutānusārin) か否かに尽きる。従って、mati を「非言語知」、śruta を「言語知」と訳す Mehta [2002] の解釈が最も無難なものと言える。

(4) mati にも「言語知」と呼び得るものが含まれる。しかし、mati の場合、言語習得時の「ことば」や聖典に書かれてある「ことば」がその認識過程で意識されないから、「言語表現を伴うもの」であっても、「ことばに従うもの」、すなわち śruta とはならない。

対象の確定を目的とする我々の知覚プロセスは、ことばの世界と切り離されるものではない。言語的描写を伴ってはじめて、我々は対象を確定することができる。そのような言語的描写を伴う知である mati を「非言語知」と呼ぶことで本来のニュアンスが伝わるかどうかについては依然疑問が残る。仏教認識論でいうところの判断を伴わない「知覚」と混同される危険性が高いから

である。また、matiに対する「非言語知」という訳語は、śrutaとの対比をあらわす際には有効であるが、他の超感官的な知、すなわち直観知、他心知、独存知という直接知 (pratyakṣa) と並べた時、matiの特徴を端的に示していると言えるだろうか。

matiとは感官による刺激の受容 (アヴァグラハ) を通じて得た情報、言い換えれば「感覚」を出発点として対象を理解する知である。結果的に先に挙げたTatia [1951]の理解と近いものとなるが、本稿では、結論として、matiに対して「感覚知」(sensory knowledge)、śrutaに対して「言語知」(verbal knowledge) という訳語を、暫定的にはあるが提案したい。

### 【略号および参考文献】

- ĀN      Āvaśyakaniryukti (Bhadrabāhu): Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad-Āvaśyakasūtram*. 4 vols. Āgamodaya Samiti Series Nos. 1-4. Mehesana, 1916-17.
- BV:      Viśeṣāvaśyakabhāṣyabhadravṛtti (Maladhāri Hemacandra): *Śrījinabhadraganīkṣamāśramaṇa-pāḍaviracitam Viśeṣāvaśyakabhāṣyam / Maladhāriśrīthemacandrasūriviracitayā śiṣyahitānāmnyā Brhadvṛtṭyā vibhūṣitam*. Śrī Yaśovijaya Jaina Granthamālā Nos. 25, 27, 28, 31, 33, 35, 37, 39. Benares, 1911-15. (Reprint. Bhvanabhānu Sūri, ed. Viśeṣāvaśyakabhāṣya. 2 Vols. Mumbai: Divya Darśan Trust, 1982.)
- JBP      Jñānabinduprakaraṇa (Yaśovijaya Gaṇi): Sukhlal Sanghavi, Dalsukh Malvania, Hira Kumari Devi (eds.), *Jñānabindu Prakaraṇa of Nyāyaviśārada- Nyāyācārya Śrīmad Yaśovijaya Upādhyāya*. Singhi Jain Series No. 16, Calcutta: Babu Sri Rajendra Singhiji Singhi, 1942.
- JTBh:    Jainatarkabhāṣā (Yaśovijaya Gaṇi): Sukhlal Sandhavi, Mahendra Kumar Shastri and Dalsukh Malvania (eds.), *Jaina Tarka Bhāṣā of Mahopādhyāya Śrī Yaśovijaya Gaṇi with Tātparyasaṅgraha*. Singhi Jain Series No. 8. Ahmedabad-Calcutta: Singhi Jaina Granthamālā, 1938.
- NDT      Niścayadvātrimśikā (Siddhasena Divākara): *Ekaviṃśatidvātrimśikā, Nyāyāvatāra, Sanmatisūtra*. Śrī-Siddhasena-Divākara-kṛta Granthamālā. Bhavnagar: Śrī-Jaina-Dharma-Prasāraka Sabhā, 1909.
- NS      Nandīsūtra (Devavācaka): Muni Puṇyavijaya, Dalsukh Malvania, Amṛtlāl Mohanlāl Bhojak (eds.), *Nandīsuttam and Aṇuogaddārāṃ*. Jaina Āgama Series No. 1. Bombay; Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1968.
- SV:      Viśeṣāvaśyakabhāṣyasvopajñavṛtti (Jinabhadra Gaṇi): see VĀBh.
- TAS      Tattvārthasūtra (Umāsvāti): Pt. Khūbacandra (ed.), *Sabhāṣyatattvārthādhigamasūtra*, Śrīmadrājacandra jainaśāstramālā, Agasa: Śrī Paramaśruta Prabhāvaka Maṇḍala, Śrīmad Rājacandra Āśrama, 1992. (3rd editon.)
- TABh    Bhāṣya on TAS (Umāsvāti): Hiralal Easikdas Kapadia (ed.), *Tattvārthādhigamasūtra*. 2 vols. Devacandra Lālbhai Jainapustakodhāra Fund Series Nos. 67, 76, Bobmay, 1926, 1930.
- VĀBh:    Viśeṣāvaśyakabhāṣya (Jinabhadra Gaṇi): Dalsukh Malvania (ed.), *Ācārya Jinabhadra's*

*Viśeṣāvaśyakabhāṣya with Auto-commentary*. 3 Vols., L. D. Series Nos. 10, 14, 21. Ahmedabad: L. D. Institute of Indology, 1966-68.

VĀBhVi Vivaraṇa on VĀBh (Koṭyārācyā): Ānandasāgara Sūri (ed.), *Siddhāntapāthodhipuṣṭatamāntaḥkaraṇa Śrī-Jinabhadraganikṣamāśramaṇaḍṛbdham Śrī-Koṭyācāryakṛtaprācīnatama-Vivaraṇavṛtaṃ Śrī Viśeṣāvaśyakaśūtram*. 2 Vols., Ratlam: Rṣabhadevjī Keśarīmaljī Śvetāmbara Saṃsthā, 1936-37.

安藤嘉則 (Ando, Yoshinori)

[1985] 「ジャイナ認識論のウパヨーガ説をめぐる諸問題—感官知と完全知を中心に—」『論集』12: 23-44.

藤永 伸 (Fujinaga, Shin)

[2001] 『ジャイナ教の一切知者論』平楽寺書店

金倉円照 (Kanakura, Ensho)

[1944] 『印度精神文化の研究—特にチャイナを中心として—』培風館

Mehta, Mohan Lal

[2002] *Jaina Psychology: An Introduction*. Varanasi: Parshvanath Vidyapeeth.

長崎法潤 (Nagasaki, Hojun)

[1988] 『ジャイナ認識論の研究』平楽寺書店

Puṇyavijaya, M., Malvania, D. and Bhojak, A. M.

[1968] 'Introduction.' In *Nandisuttam and Aṇuogaddārāṃ*. See NS.

Shastri, Indra Candra

[1990] *Jaina Epistemology*. Varanasi: P. V. Research Institute.

Tatia, Nathmal

[1951] *Studies in Jaina Philosophy*. Varanasi: P. V. Research Institute.

宇野 惇 (Uno, Atsushi)

[1965] 「ジャイナ教知識論の一考察—「認識」の概念の発展—」『密教学』1: 168-190.

宇野智行 (Uno, Tomoyuki)

[2005] 「認識過程と想起 (pratyakṣa) —二人のヘーマチャンドラー—」『仏教とジャイナ教：長崎法潤博士古稀記念論集』平楽寺書店 73-85.

[2010] 「ジナバドラによる直接知 (pratyakṣa) の再編成」『人間文化研究所年報』21: 71-93.

## 【注】

<sup>1</sup> 例えば、Shastri, I. C. [1990: 196-213]、宇野 (智) [2010: 72-74]等を参照されたい。

<sup>2</sup> 金倉[1944]、宇野 (惇) [1965]、安藤[1985]、長崎[1988]、藤永[2001]等。

<sup>3</sup> ここで言われる‘bhāvaśruta’とはśrutajñānaのことである。See BV 33, 16 on VĀBh 99: tad bhāvaśrutam śrutajñānam ity arthaḥ. なお、bhāvaśrutaについては、後に出てくるdravyaśrutaとあわせ、Shastri, I. C. [1990:

302-303], Tatia [1951: 51-53]等を参照されたい。

<sup>4</sup> ここ用いられる‘tatkāraṇam’という表現については、マラダーリ・ヘーマチャンドラの理解に従った。BV 30, 33-34 on VĀBh 93: tatkāraṇam iti tñīndriyamanāṃsi kāraṇam yasya sābhāsānumānasya samyaganumānasya ca tat tatkāraṇam jñānam anyatrāpi parokṣam dr̥ṣtam. (「‘tatkāraṇam’について。tatkāraṇaとは属格のバフヴリーヒであり、それら、すなわち、感官やマナスを原因とする誤った推理や正しい推理のことである。そのような知は他の場合にも間接知であると経験される」)

<sup>5</sup> ‘sābhāsam anumānam’という表現からは、「誤った推理」しか理解されないが、ジナバドラの自注から「正しい推理」もここで意図されていることが理解される。SV 24, 18 on VĀBh 93: yathānumānam anumānābhāsās cāsiddhviruddhānaikāntikāḥ. (「例えば、[正しい] 推理や不成立、矛盾、不確定といった誤った推理と同じように」) マラダーリ・ヘーマチャンドラは、ジナバドラ自身の理解に従いつつ、より分かりやすく、具体的に二つの論証式を挙げてこの箇所を説明している。BV 30, 35-38 on VĀBh 93: yad indriyamanonimittam jñānam tat parokṣam, saṃśayaviparyayānadhyaavasāyānām tatra saṃbhavāt, indriyamanonimittāsiddhānaikāntikaviruddhānumānābhāsavat, iti prathamah prayogaḥ. yad indriyamanonimittam jñānam tat parokṣam, tatra niścayasambhavāt, dhūmāder agnyādyanumānavat, iti dvitīyaḥ. yat punaḥ pratyakṣam tatra saṃśayaviparyayānadhyaavasāyāniścayā na bhavanti eva, yathāvadhyādiṣu, iti viparyayaḥ. (「論証式1：【主張】 おおよそ感官やマナスを原因とする知、それは間接知 (parokṣa) である。【理由】 何故なら、疑惑 (saṃśaya)、錯誤 (viparyaya)、不決定 (anadhyaavasāya) がその [知] に起こるから。【喩例】 例えば、感官やマナスを原因とする、不成立、不確定、矛盾といった誤った推理と同じように。論証式2：【主張】 おおよそ感官やマナスを原因とする知、それは間接知である。【理由】 何故なら、その [知] には確定 (niścaya) が起こるから。【喩例】 例えば、煙などに基づく火などの [正しい] 推理と同じように。さらに [これらの論証式の] 対偶 (viparyaya、すなわち否定的遍充) は [以下の通りである]。おおよそ直接知である [すなわち、間接知でない] ならば、その [知] には疑惑、錯誤、不決定、確定は起こらない。例えば、直観知 (avadhi) などと同じように」) なおヤショーヴィジャヤは、この箇所を用いて次のように述べている。See JTBh 2, 17-18: kiñ ca, asiddhānaikāntikaviruddhānumānābhāsavat saṃśayaviparyayānadhyaavasāyasambhavāt, sadanumānavat sanketasmarāñāpūrvakanīścayasambhavāc ca paramārthataḥ parokṣam evaitat. (「さらにまた、[この世間的直接知には、] 不成立、不確定、矛盾という誤った推理と同じように、疑惑、錯誤、不決定が起こり得る。そして、[この世間的直接知には、] 正しい推理と同じように、言語協約の想起などを前提とする確定が起こり得る。従って、究極的な観点からすれば、この [世間的直接知] は間接知に他ならない」)

<sup>6</sup> TAS 1.20: śrutam matipūrvam dvyānekadvādaśabhedam // (「śrutaはmatiを前提とする。[śrutaには] [aṅgabāhyaとaṅgapraviṣṭaの] 二種、[aṅgabāhyaの下位分類] 多種、[aṅgapraviṣṭaの下位分類] 十二種がある」) なお、ジャイナ教におけるアーガマの分類については、Puṇyavijaya, et al. [1968: 23-26]を参照されたい。

<sup>7</sup> Tatia [1951: 48]にも同じ指摘がなされている。

<sup>8</sup> ĀNir 17-18: patteam akkharāim akkharasamjoga jattī loe / evaiā payaḍiḥ suanāṇe hunti nāyavvā // katto me vaṇṇeum sattī suyanāṇasavvapaḍiḥ / caudasavihanikkhevam suyanāṇe āvi vocchāmi // [Skt.: pratyekam akṣarāṇy akṣarasamyogā yāvanto loke / etāvatyah prakṛtyah śrutajñāne bhavanti jñātavyāḥ // kuto me varṇayitum śaktiḥ

śrutajñānasarvaprakṛtīḥ / caturdaśavidhanikṣepaṃ śrutajñāne cāpi vakṣyāmi //]

<sup>9</sup> NS 61: se kiṃ taṃ suyanānaparokkhaṃ, suyanānaparokkhaṃ coddasavihaṃ paññattaṃ, taṃ jahā --- akkharasuyam, aṅakkharasuyam, saññisuyam, asaññisuyam, sammasuyam, micchāsuyam, sāiyam, anāiyam, sapajjavasiyam, apajjavasiyam, gamiyam, agamiyam, aṃgapaviṭṭhaṃ, aṇaṃgapaviṭṭhaṃ // [Skt.: atha kiṃ tac chrutajñānaparokṣam, śrutajñānaparokṣam caturdaśavidhaṃ prajñaptam, tad yathā --- (1) akṣaraśrutam, (2) anakṣaraśrutam, (3) saṃjñīśrutam, (4) asaṃjñīśrutam, (5) samyakśrutam, (6) mithyāśrutam, (7) sādikam, (8) anādikam, (9) saparyavasitam, (10) aparyavasitam, (11) gamikam, (12) agamikam, (13) aṅgapraviṣtam, (14) aṇaṅgapraviṣtam //]

<sup>10</sup> NDT 12ab: vaiyarthyatiprasaṅgābhyāṃ na matyabhyadhikam śrutam / (「śrutaはmati以上のものではない。無意味 [な重複] (vaiyarthya)、過大適用 (atiprasaṅga) という二つの [過失が付随する] から」)

<sup>11</sup> JBP 16, 16-17: navyās tu śrutopayogo matyupayogān na pṛthak, matyupayogenaiva tatkāryopapattau tatpārthakyakalpanāyā vyarthatvāt. (「一方、ナヴィヤたち [すなわち、シッダセーナ・ディヴァーカーラ] は [次のように考える]。śrutaという認識作用 (upayoga) は、matiという認識作用と別個なものではない。何故なら、matiという認識作用だけでその [śrutaという認識作用] によってなされるべきものの説明が付くならば、その [śrutaという認識作用] が [matiという認識作用と] 別個なものであると考えるのは無意味であるから」)

<sup>12</sup> Tatia [19: 59-61]も参照されたい。

<sup>13</sup> なおジナバドラと同様、注釈者コーティ・アーチャーリヤもここでの「ことば」(śruta) を「聖典」(śrutagrantha) と理解している。VĀBhVi (I) 46, 10-11 on VĀBh 99: śrutānusāreṇeti śrutagranthānusāreṇāntarjalpākāreṇa śabdollekhena śabdārthāhlocanadvāreṇa ghaṭa ityevam tad bhāvaśrutam. (「『ことばに従って』、すなわち、聖典 (śrutagrantha) に従って、内的つぶやきというかたちの言語的描写によって、ことばの対象を見ることを通じて「瓶だ」というような [知が起こるが]、それがbhāvaśrutaである」)

<sup>14</sup> ヤショーヴィジャヤは次のように言い換えている。JTBh 2, 23-25: śrutānusāritvam ca saṅketaviśayaparopadeśam śrutagranthaṃ vānusṛtya vācyavācakabhāvena saṃyojya “ghaṭo ghaṭaḥ” ityādy antarjalpākāragrāhitvam. (「そして、ことばに従うものであること (śrutānusāritva) とは、言語習得に関する他者からの教示、もしくは、聖典 (śrutagrantha) に従って、表示関係 (vācyavācakabhāva) によって [瓶という実在物と「瓶」ということばを] 結びつけたうえで、「瓶だ、瓶だ」などという内的つぶやき (antarjalpa) というかたちで [瓶という対象を] 把握するものであることである」)

<sup>15</sup> 例えば、ウマースヴァーティは次のように述べている。TABh (I) 88, 30-31 on TAS 1.20: śrutam āptavacanam āgama upadeśa aitihiyam āmnāyam pravacanam jinavacanam ity arthāntaram. (「śrutaは、信頼できる者のことば (āptavacana)、アーガマ (āgama)、教示 (upadeśa)、言い伝え (aitihya)、伝統的教説 (āmnāya)、ブラヴァチャナ (pravacana)、ジナのことば (jinavacana) と同義である」)

<sup>16</sup> 宇野 (智) [2005]を参照。

<sup>17</sup> ヤショーヴィジャヤは次のように簡潔に言い換えている。JTBh 2, 25-26: nanv evam avagraha eva matijñānasyād, na tv ihādayaḥ, teṣāṃ śabdollekhasahitvatvena śrutatvaprasaṅgād iti cet. (「【反論】 そうであるなら、アヴァグラハだけがmatijñānaとなってしまう、イーハーなどはそうではなくなってしまう。何故なら、それら

[イーハーなど] は、言語的描写を伴うので、śrutaであることになってしまうから]

<sup>18</sup> Shastri, I. C. [1990: 203-207] を参照。

<sup>19</sup> ヤショーヴィジャヤは次のように述べている。JTBh 2, 26-27: na, śrutaniśritānām apy avagrahādīnām saṅketakāle śrutānusāritve 'pi vyavahārakāle tadananusāritvāt. (「【答論】 そうではない。アヴァグラハなどはことばに基づくもの (śrutaniśrita) でもあり、[それらアヴァグラハなどは] 言語習得時にはことばに従うものであるが、日常活動時にはその [ことば] に従うものではないから」)

<sup>20</sup> ヤショーヴィジャヤは、この記述に従い次のように述べている。JTBh 2, 27-28: abhyāsapāṭavavaśena śrutānusaraṇam antareṇāpi vikalpaparamparāpūrvakavividhavadhavanapravṛttidarśanāt. (「反復経験による熟達によって、ことばに従うことがなくても、一連の途切れることのない概念的思考を前提として多様なことばが出てくるのが経験されるから」)

**【註記】** 本稿は平成22年度科学研究費補助金・基盤研究 (C) (研究代表者：宇野智行博士) により開催された研究会の成果の一部である。研究会では、宇野博士 (筑紫女学園大学・准教授) ならびに佐藤宏宗博士 (東方研究会・研究員) に数々の有益な助言を頂いた。ここに記して謝す。

(こばやし ひさやす：人間文化研究所 リサーチアソシエイト)

